



# 王 伝統の手技

第十四回

「鑿のカツラを  
どう打っても90度になるように  
金槌の柄には角度が付いている」。  
そんな道具を自在に使いこなし、  
300年先を見据えた  
木彫刻を作り続ける北澤一京さん。

「長生きするもんだな。こんないいもんが見られるんだからな」と言わしめた北澤さんの龍。職人の名前は、銘にあるのではない。作品にその腕に伴った名がくつきりと表れるのだ。



千葉県佐原市・東関戸町会の山車に彫られた北澤さんの作品。水郷の町というイメージから亀が彫られている。

職人の仕事は、  
熊野松風に米の飯だ

龍でも観音様でも、  
みんな木のなか  
に埋まっている

目の前に並んだおびただしい数の鑿。聞けばその数、ざっと300本以上。「取材に見えた方は、たいがいまず道具の数に驚きますね」

「その言葉を継いだのは江戸木彫刻師の北澤一京さんだ。」

職人にとって、道具は文字どおり「命」といっていいだろう。「伝統の手技」でも、これまで、さまざまな道具を操る職人さんたちを取り上げてきた。が、いかになんでも今回は、その数が尋常ではない。

「あとこれに金槌、小刀などを加えると、全部でどのくらいの数になるのか……。どんな注文が来ても、できません！」と言わないのが職人だから。まずは道具を持っていなきや話にならない。じゃないと、駄物（値打ちのないもの）しか扱えませんか

「後ろで束ねた銀髪。作務衣の袖口から伸びる太腕。そして鋭い眼光。その風貌から「気鋭の彫刻家」を思わせる北澤さんだが、

「よく言われるんですけど、私は一職人。芸術家じゃありませんよ」

北澤さんいわく、無から有を産み出すのが芸術家。一方、昔から受け継がれてきた技を守るのが職人なのだという。

「それに作家さんは自分の作品に名前を載せるけど、私らはそんなことしませんから。どっちが上か下かはわからないけど、ただ、私が作るものは、おそらく芸術家には作れないだろうなあ」そう語る北澤さんの言葉には、「一職人」であり続けてきたことへの、自負が漲っていた。

北澤さんがこの道に入ったのは、今から55年前、昭和31年のことだ。

「終戦の年に親父が戦死して、お袋が花を行商しながら、きょうだい4人を育ててくれたんだけど、帰りが遅いから、私らが晩飯の支度をするでしょ。で、窯に薪をくべながら小刀でこけしなんか彫っていると、近所のおじさんが来て、あんちゃん、うめえなあ。そういう仕事やったらどうだ。って……それが始まりでした」

中学を卒業した北澤さんは、さる彫刻師を訪ね埼玉へ。そこ

ろが、道に迷ってしまい、たまにたま仏具店に飛び込むと、「ご主人がね、そんな下手糞なところへ行くなら、俺が腕のいい職人を紹介してやるって（笑）。連れて行かれたのが浅草の親方のところだったんです」

の出会いだった。とはいえ、住み込みの内弟子に給料はない。月2回の休日にもらう小遣いも大半が道具代へと消えていった。「弟子入りしたばかりでなにもできない小僧さんは最初、親方が荒彫りしたものをひたすら削るんです。そのとき親方と同じ

叩き鑿で荒彫りした後、中彫り、仕上げ彫りと進んでいき、作品が完成する。

成田山開基1070年祭で新勝寺総門に飾られた「獅子」の制作工程



①素材の樺を獅子の大きさに合わせる。



②表面に獅子の下絵を貼る。



③荒削りをしていく。



④獅子は、いよいよその姿を見せていく。



⑤完成した獅子。これは火除け獅子。毛髪が濡れているように彫るのが特徴だ。

北澤一京 Kitazawa Ikkyou



趣味ではじめた水墨画でも数々の作品賞を受賞。谷文晁、渡辺華山の流れを汲む。「水墨画は墨のとり方で濃淡をつけ、塗るのではなく筆の勢いでスツと書く」。北澤さんが持った水墨画は妙義山を描いたものだ。

1940(昭和15)年栃木県足利市生まれ。15歳で東京・浅草の江戸木彫刻師、飯島米山師のもとへ弟子入り。10年の修業を経て、昭和42年に独立。葛飾に工房を構え、昭和58年の秩父祭り会館屋台の彫刻を皮切りに、相模寒川神社の一之宮、二之宮神輿(昭和60年)、深川富岡八幡宮の黄金大神輿(平成3年)、箱根神社の九頭竜神輿(同)などの神輿彫刻を数多く手がける。また山車や屋台彫刻のほか、仏壇彫刻にも定評があり、故石原裕次郎氏の屋久杉仏壇も北澤さんの手によるもの。平成17年、成田山開基1070年祭では新勝寺総門に飾られる「獅子」16体のうち6体を担当。東京都伝統工芸士。東京都優秀技能認定。葛飾区伝統工芸士認定。協同組合江戸木彫刻常任理事。また「谷文晁」「渡辺華山」の流れを汲む水墨画では日本南画院秀作賞を受賞。国画水墨院常任理事も務める。本名は京一。

東京都葛飾区水元4-3-19  
TEL: 03-3600-1957



右は長男の秀太さん。平成3年に一京氏に弟子入りし、神輿・山車彫刻の他、能や狂言で使われる能面の面打ち師として名を馳せている。

※木彫刻の歴史は6世紀の仏教伝来とともに始まったといわれる。平安時代から鎌倉時代に多くの仏像が彫られ、室町時代になると社殿や寺院の柱・欄間などに装飾を施す建築彫刻として発達した。江戸木彫刻は、もともと大工が手がけていた建築彫刻が江戸時代に分業化され、今日に至っている。

そんな北澤さんの座右の銘が「熊野 松風に米の飯」、能の言葉だそう。 「簡単に言えば、何度見ても飽きさせない仕事をしたい、ということ。これは自分にも長男にも常に言い聞かせている言葉なんです」

取り除いてやっているだけなんです」  
ギリシア神話に登場する木の精霊は、自らが宿る木が枯れるとともにその命を閉じる。精霊に敬意を払うことなく木を傷つける人間には、神々の罰が与えられるというが――。  
ともあれ、常に木と向き合い、対話しながら掘り進めていくという北澤さんの姿勢は、50数年一貫して変わらない。

長男秀太さんは大学を卒業した平成3年、23歳で北澤さんに弟子入りし、いまや日本有数の若手面打ち師として、その名を馳せている。  
「伝統というのは、なにも人を育てることだけじゃない。いい仕事を残せば、それが必ず次の世代に伝承していく。そこを信じて、とにかくいい仕事をしたいんです」  
職人は作品に名前を刻まない。だが、ひと目でそれとわかる仕事を残す。  
あの富岡八幡宮の渡御巡行の際、数人の年寄りが「長生きするもんだな。こないないもんが見られるんだからな」と漏らした感嘆。もちろん北澤さんの作品だ。北澤さんの気概と誇りが、その一点に凝集した瞬間だった。



道具は鑿だけで300本以上。うち、叩き鑿が100本くらい、仕上げ鑿は200本以上あるという。鉋はすべて自作。特殊な部分に使うことが多く、大きさや用途で使い分ける。



北澤一京さん

見る者を圧倒する「鑿の数」

物だったが、 「彫ったものを親方に見てもらいと、これ、誰がやったんだあ、ちょっとこい！」 って。で、スツと直しちゃう。こんちくしようと思いましたが。よし、次は絶対、親方に鑿を入れさせねえぞ、って。そう思ってたんですけど、 たんですよ」

北澤さんがそんな不思議な感覚を覚えるようになったのは、50代に入ってからだという。 「要はね、龍でも観音様でも、もともとみんな木のなかで埋まっているんですよ。私がそれを鑿という道具を使って、まわりを



木彫刻には檜や楠、桂などの材料が多く使われるが、山車や神輿彫刻には樹齢200年、300年といった樺や檜が使用されるという。古書店で購入したという、すべて肉筆で書かれた江戸時代の下絵集。昔の職人たちの見事な筆遣いは、思わず息を呑むほど。資料を数多く収集しているのも北澤さんの誇りだ。

道具がないと仕事にならない。だから、弟子はもらった小遣いを持って鍛冶屋へ行つて、親方と同じ道具を作ってもらおう。いわば、それが彫師の通過儀礼みたいなものだったんですよ」  
修業時代、いかに自分の道具に投資できるか、それは師匠が弟子のやる気を見るバロメーターでもあったわけだ。  
休日には柴又・帝釈天を訪れ、戦前の名工たちが残した仕事ぶりを、穴が開くほど眺めた。米山師匠は、いたって穏やかな人

た。そして平成3年、富岡八幡宮の宮神輿再建では、250年ぶりという大仕事も手がけた。 「樺は雨風にさらされても腐らないし、ゆうに300年は持ちます。だから、作り手は300年先を考えて鑿をあてる。あの時ああやっておけば良かった、なんていうのは絶対に許されないわけです」  
ひと口に300年先を見据えた仕事、といわれても凡人には考えも及ばないが、そんな重圧のなかで北澤さんはひと彫りひと彫り、木に魂を入れてきた。 「立派な神輿になると、1台に80本も龍が付くことがあるんですが、彫っていると必ず、俺はそんな格好してねえぞ！」 って言い出す龍がいるんだね(笑)。で、もう一度よく眺める。すると、自分の想像を超えたものが出てくるんです」